

ラ・ロシュフーコー ¹⁾ 『箴言集』研究の為に資料調査	
柴田 恵美	比較社会文化学専攻
期間	2008年2月3日～2月17日
場所	フランス パリ国立図書館・ソルボンヌ大学図書館
施設	2月4日～2月6日 ソルボンヌ大学図書館 2月7日～2月16日 パリ国立図書館

1. 海外調査・研究の必要性

博士論文においては、「ラ・ロシュフーコーにおけるHonnête homme（紳士）像」と題し、ラ・ロシュフーコーが理想とした「Honnête homme（紳士）」とは一体どのようなものであったのか具体的に解き明かしたいと考えている。その為には、彼を取り巻く様々な思想的環境を調査し、17世紀全体の思潮の流れにおいて、彼がいかなる思想に共鳴し、いかなる思想に反発しつつ『箴言集』をつくり上げていったのか、言い換えるなら、時代の中の彼の思想の位置を把握するという、言わばマクロ的な視点と、Brotier版、Gilbert版、Régnier版など『箴言集』の主要かつ異なる版を比較し、そこに収められた箴言や考察の削除や加筆、言葉や表現の変更などに表れる彼自身の思想の変化を捉えるという、言わばミクロ的な視点、両面にわたる調査、研究が必須である。

ミクロ的な観点における調査においては、上記3版を採り上げ、今回は、著者による他の宮廷人達との交際についての言及が多く見られる「考察」部分に焦点を絞って、其々の版の由来、実際の手書き原稿との関連、大まかな枠組みの修正部分などの概要の把握を目標とした。こうした作業は、筆者の「紳士」像における思想の変遷・変化の細かな実証を具体的に拾い上げてゆく前になさなければならぬ必要不可欠な作業の第一歩であると思われるからである。一方、マクロ的調査に関しては、17世紀、知的革命期におけるヨーロッパの文学・科学に関する動向を証言する*Le Journal des Savants*、『箴言集』を取り巻く環境の一つであり、同時代の幕藩体制下の日本では実現されなかった女性解放、その先駆けとも言われるプレシオジテ(*préciosité*)が繰り広げる社交界「サロン」の思潮を表す*Mercurie Galant*という、二つの刊行誌を複数年に渡って調査し、『箴言集』との思想的関連の可能性を

探ることを目指した。

上記の様な資料の、ミクロ及びマクロの両面に渡る調査は、従来とは異なる新たな視点を得つつ、ラ・ロシュフーコーの言わんとする「Honnête Homme(紳士)」像を解明する上では欠かすことのできない最も重要な初歩的な作業のひとつであると考えている。

2. 過去の研究成果と今後の研究との関連性

修士論文「ラ・ロシュフーコーにおける聖エピクロスのイメージ」では、ラ・ロシュフーコーが、理性の限界を知り、一般的価値観に左右される事や上辺を飾る事なく自然に従うエピクロスの姿勢に共感を覚えたことを示し、投稿論文「ラ・ロシュフーコーの『箴言集』(1678) 456番における「esprit」と「jugement」」では、彼が、目に見えるもの、論理・論証に支えられた「esprit」よりも、そうした共通の価値基準を超えた、ある感覚に根ざす己の内にある基準である「jugement」を次元の高いものとして捉えていることを示した。また、『人間文化創成科学論叢』第10巻への投稿論文、「ラ・ロシュフーコー、『箴言集』における狂気について」では、彼が、その特性がエピクロスの姿勢に通ずる2種の狂気、即ち現実逃避としての狂気と既成の価値体系を打ち破り、独自の価値、固有の判断を生み出す創造的エネルギーとしての狂気を肯定することを示した。主として箴言を読み解く事から得られる、上記の様な独自の判断基準を持って生きることをよしとする彼の考え方は、彼独特の人生哲学を示すものとも言えるだろう。

一方、「箴言」より後年に書かれたとも目される「考察」では、彼が変説したのではないかという論も存在する程に、規範や己よりも他との調和を重んじる「Honnête Homme(紳士)」像が展開されている。それは果たして変説であるのか、仮に変説があったとする

ならどの様な思想的環境の影響を受け得たのか、ないとするなら2つの相反する著述にどう折り合いをつけるのか、今回の調査は、統一された「紳士」像解明に向けての必要な1段階なのである。

3. 調査の概要

① *Le Journal des Savants*

*Le Journal des Savants*は、1665年1月5日にパリで初刊された文芸・科学雑誌で、ヨーロッパで刊行された主な刊行物のカタログ、当時の文芸・科学・物理・天文学上の新発見に関するあらゆる記事が掲載された定期刊行物である。ラ・ロシュフーコーの没年、1680年を経て、1723年までは、不定期ではあるものの、週刊誌の体裁であった。1665年から、彼が『箴言集』の決定版を刊行する1678年まで、この雑誌に記載された主な記事には、その頃天空に出現した彗星についての観測結果、デカルト²⁾の『方法序説』や『人間論』に対する反論、補足、様々な意見を述べたものが目立つ。とりわけ、デカルトの諸説によって、人間の魂と精神の問題・魂と感情の問題・人間の内部器官の働きについてなどへと記事のテーマが広げられていく課程が読み取れたこと、言い換えれば、人々の視点が、人間の内部の観察に向かう方向へと進んでゆく課程が読み取れたことが非常に興味深い。

また、1665年3月9日の記事に、同年出版された『箴言集』第一版の書評が掲載されている。これは、匿名の形をとっているが、ラ・ロシュフーコーからの依頼をうけたサブレ夫人³⁾の投稿によるもので、実際は、1664年に印刷が終えられていた第一版に対する世評調査を目的にした計画的なものであったらしい。実際、1665年2月18日付のサブレ夫人からラ・ロシュフーコーに送られた書簡には投稿予定の原稿が添えられ、「*Le Journal des Savants*投稿の為に、私が考え出せることは以上のようなことです」というサブレ夫人の、ラ・ロシュフーコーの了解を乞うものとも受け取れる文言がはっきりと記されている。

また、書評には、「人間が、自らに抱いている偽りの観念を認識させ、キリスト教なくして、人間は完全な善をなしえないことを教える著作である」とあり、これは、原罪によって本性が墮落した人間は、その身分や地位にかかわらず、神の恩寵なくして正しい行いをなすことはできないという、ジャンセニストとしてのサブレ夫人の思考を明確に示すものであると言える。ラ・ロシュフーコー自身がジャンセニストであったかどうかの検証はここでは行わないが、人間の価値を決めるものが人間の自由意志によってなされた行為

などではなく、人間の自由にならない気質や運命のようなものであるとする考え方、外的要因が人間の行為を決定すると見なす、言わば、人間を卑しめ、貶める考え方は、『箴言集』の一部に見られる思想傾向であり、それがジャンセニズム的であることは、やはり否めまいと思われる。この様に、新しい科学への深い関心及びそれを検証しようとする精神と一見それと相反するように思える人間理性に対する悲観的思想傾向とが、同じ刊行物の中に平行して表れている事実を確認できたことは、当時の知的背景を分析・統括する上で非常に興味深く有益な発見であった。

以上のことから理解されること、それは、まず、彼自らが*Le Journal des Savants*の読者であったこと、次に、彼が、第三者に依頼してまでも自著の世評調査を行うことから鑑みても、この雑誌が、当時の社交界全般である程度認められた存在であり、尚且つラ・ロシュフーコーを含む社交界の人々に少なからぬ何らかの影響を持っていたこと、そして、先の項でも述べた通り、この時代の人々の視点は、人間の内部の観察へと向かう方向へと進んでゆきつつあったということである。

② *Mercure Galant*

*Mercure Galant*は、1672年、Donneau de Vize⁴⁾によって、著名人の死亡・結婚広告、モード、種々の分野に関する情報の公開、新作詩の掲載・小説の刊行情報提供などを目的として刊行された雑誌である。恋愛問答、なぞなぞ遊びのようなものにかかなりのスペースを割く、いわゆる社交雑誌であり、当初は、週刊誌、後に月刊誌となる。先の*le Journal des Savants*に比べ、学問性はかなり薄い。特に、恋愛論に関して言うなら、ラ・ロシュフーコーがそれまでに批判してきたようなプレシオジテ的色彩がかなり濃厚であると言える。

『箴言集』の初版は1665年であり、この雑誌の初刊よりかなり以前のことであるとは言え、1671年の第三版、1675年の第四版、そして何よりも、1678年の決定版について、何らの言及もなく、著者ラ・ロシュフーコー自身あるいは彼の為に誰かが行った投稿も見あたらない。1680年のラ・ロシュフーコーの死亡記事が載るだけである。

従って、先の*Le Journal des Savants*との性質・刊行主旨の相違、ラ・ロシュフーコーが自著の発表に際して2つの刊行物に置く比重の違いといった事実から鑑みるならば、『箴言集』のような著書を歓迎するだろう人々、言い換えれば、ラ・ロシュフーコーの周辺にいて読者になる可能性のあった人々は、単なる遊びとしての社交や恋愛遊戯を好む人々なのではなく、ある

程度の学問的・宗教的認識を備えた人々であったと想定される。

しかしながら、『箴言集』決定版の出された1678年と同年に出版された、ラ・ファイエット夫人⁵⁾の手による小説『クレープの奥方』について、誌上で読者アンケートが実施されている。この小説は、一般的に人間心理の複雑な内面性を描いたものであるとされているが、より詳しく述べるなら、トカンヌの述べているように⁶⁾、ここでは、現実意識の中では語りきれない人間の不安定な自我、自分でさえも気づかぬ下部意識に動かされる人間が綿密に描写されているのである。人間が、自身でも気づかぬうちに、己の情念や自己愛に引きずられる惨めな存在であるという考え方は、ラ・ロシュフーコーの人間観に通じるものであり、彼がラ・ファイエット夫人に影響を与えたであろう事は今までも幾度となく指摘されてきたことである。読者から寄せられたこの小説に対する意見・感想は、専ら、恋愛談義の域を出ず、こうした哲学的かつ宗教的考察にまで踏み込んだものではない様だが、晩年を共に過ごし、この雑誌の、言わば花形となったラ・ファイエット夫人の傍らにいたラ・ロシュフーコーと、この雑誌との思想的相関関係の有無をはっきりと結論づけるには、より詳しい調査をすべきであろうと思われる。

③ Brotier, Gilbert, Régnier各版の由来、手書き原稿との関連、主な修正点について

・Brotier版⁷⁾

「考察」には、当初、題名がつけられていなかった。1789年、G.Brotierが「*Réflexions Diverses*」(さまざまな考察)と題して刊行。1731年、Granet神父が「*Réflexions nouvelles*」(新しい考察)と題して出版したとされるものと含まれる項目は同じである。現19項のうち7項を含む。即ち、第5項(信頼について)、第16項(才気の色々について)、第10項(趣味について)、第2項(交際について)、第4項(会話について)、第13項(偽物について)、第3項(顔と拳措について)の7項である。ただし、第4項についてののみ、1731年のものと内容が大きく異なる。読みやすくするという意図のもとに各項目の文章が、段落ごとに区切られ番号が施されている。

・Gilbert版⁸⁾

19世紀、ラ・ロシュフーコー家所有であるラ・ロッシュ＝ギュイヨン城で発見された17世紀の原稿の写本、A(163)と名づけられた手書き原稿を基にD.L.Gilbertが1868年、グラン・ゼクリバン・ドゥ・フランス叢書『格言集』として刊行したもので、「考察」

全19項を含む。

そもそも、手書き原稿A(163)は、Barthélemyによって1836年に発見された。Barthélemyは、ラ・ロシュフーコー家の所有であるラ・ロッシュ＝ギュイヨン城内に、一族によって保存されていた原稿の中に、Brotier版で出された7項を含む全19項の考察を発見したのである。Laurence Plazenet校訂・解説による『箴言集』⁹⁾に収められている「考察」に関する概略を読む限りでは、Barthélemyは、先のBrotier版で発表された7項の他に新たに12項を付け加え、計19項の考察を発表したように解釈していたのだが、実際Barthélemy版を手にしてみると、彼が、全19項のうち、第13項(偽物について)の最終段落部分、第15項(色好みの女と老人)、第17項(心変わりについて)、第18項(引退について)、第14項(自然と運命の手になる模範について)、第12項(病気の起源について)、第9項(人間と動物の類似について)、第8項(嫉妬の不確かさについて)、第11項(恋と人生について)、第7項(手本について)、第6項(恋と海について)、第1項(本物について)の12の項、即ち、Brotier版に唯一含まれていた第13項を入れて全部で12の項を掲載し、1863年に刊行していた¹⁰⁾こと、また、残りの第19項(今世紀の出来事)に関しては、Pièce Historique という大見出しをつけて、「考察」とは別の章に収めていたことがわかった。

GilbertはA(163)に含まれた考察19項全てを編集し掲載した。しかし、Gilbert版では、A(163)には18世紀の筆跡と思われる書き込みの痕跡が多数あるという理由から、全19項のうち、先に挙げた1731年の初版本とBrotier版に掲載された7項を含む10項は残し、残りの9項は本人のものではないという理由から破棄すべきであろうと示唆されている。

・Régnierによる補遺⁹⁾

同じくラ・ロッシュ＝ギュイヨン城内で新しく発見され、Régnier自身が、17世紀に書かれたと判定した手書き原稿325bisをもとに、Gilbertの作業を見直し、グラン・ゼクリバン・ドゥ・フランス叢書に詳細なヴァリエントを付け加えたもの。

325bisでは、考察19項のうち、第6項(恋と海について)及び第12項(病気の起源について)に斜線が引かれ、第3項(顔と拳措について)の一部が削除されていた為、Régnierはそれを取除いて、「考察」を全17項のものとした。但し、この斜線が、ラ・ロシュフーコー自身の手によるものなのか否かは、論が分かれる。また、新たに4つの考察を、第19項(今世紀の出来事)の後に加えている。即ち、「モンテスパン夫人の肖像画」、「レ枢機卿の肖像画」、「アルクール

伯爵」、「リシュリュー枢機卿の初期に関する覚書」の4つである。しかし、Régnierの作業は、補遺を加えてGilbertの仕事の不完全さを補うに留まり、Régnier版「考察」という完全な作品の形で手書き原稿325bisを紹介したわけではない。Régnierがこの補遺を完成した後、手書き原稿A(163)及び325bis共に紛失する。この後出された、現在最も普及している代表的な版の一つであるTruchetによる校訂版は、先のRégnierの補遺から伺える325bisを基本として構成されたものであるが、その他、既出であるBarthélemy、Gilbertによって伝えられたA(163)、更には現存する唯一の手書き原稿のコピーを収めた、1927年出版*La première rédaction des Maximes, d'après un manuscrit inédit, avec une préface de Gabriel de La Rochefoucauld*を参照したとされる。この1927年出版の本に入れている考察の項目は、数・種類共にBrotier版のものと同じであった。

以上、「考察」をめぐり、各版の成り立ちを調べることで3つの手書き原稿にたどり着くに至った。また、各版が、現存する考察全19項のうちのどの項目を入れ、どの項目を削除したか、どの項目を補ったかの概要を捉えることが出来た。現代の作品であれば、眼前にあるテキストが全てであるが、17世紀など多くの時を経た作品の場合、変更・修正点を捉えながらルーツとなる原稿にたどり着くまでの、こうした煩雑とも言える作業は、本来の作品の姿・主旨をより正確に把握する為の必要不可欠なものなのである。

「考察」の編成年については、「箴言」と同じく、遅くとも1659年から作者ラ・ロシュフーコーが死を迎えるまでの約20年間にまたがり、「考察」中に含まれる箴言の発表時期から、彼がこの長い期間のうちの初期と晩年に活動を集中したとする説、各項目のテーマの近似性から「考察」が多数年に渡って書かれたと考えることは難しいとする説、書かれた文体の文法的見地から、「考察」は「箴言」よりも後年に書かれたものであるとする説など、諸説存在するようだ。

4. 今後の展望

以上述べてきた通り、今回の*le Journal des Savants*及び*Mercure Galant*などの定期刊行物に関する調査の結果、17世紀における哲学・科学・天文学などの新発見と、人々の視点が人間の魂と精神の問題・魂と感情の問題など人間の内部の観察へと向かう傾向と、人間を卑しめ、貶める悲観的な思想傾向が歩みを同じくしていることをうかがい知ることが出来た。ラ・ロシュフーコーの手による「考察」は、こうした時代の傾向

の中で生まれたわけであるが、博士論文においては、この調査結果を踏まえ、この時代におけるより幅の広い思想の潮流を視野に入れつつ、一つ一つの項目を検証していくことでこの作品の時代的位置を論じていきたいと考える。また、各版の変更・修正点に見え隠れする筆者の思想の変化などを詳細に調査しつつ、「考察」それぞれの手書き原稿に表れる「Honnête Homme(紳士)」像を時代を追って探ることで、その具体的な姿を描き、尚且つ、それを「箴言」に表れる「紳士」像と比較することによって、筆者が最終的に目指したもの、即ち統一された「紳士像」の解明をはかってゆきたい。

また、ラ・ロシュフーコーの『箴言集』は、その成り立ちから言っても、社交界という「場」なしでは存在し得なかった作品であるが、このような、ひとつの文学作品を、「場」の文学として捉え、それを生み出した時代の思想潮流及びサロン文学との相互関連性を探る為に行った*Le Journal des Savants*、*Mercure Galant*などの資料調査は、例えば、紫式部や清少納言に代表されるような日本の宮廷文学を海外に紹介する際にも応用できる手法であると考えられる。

注

- 1) François VI de La Rochefoucauld, 1613-1680. 著作である『箴言集』*Maximes*の刊行年は、本文にある通り、初版が1665年、第二版1666年、第三版1671年、第四版1675年、決定版が1678年である。
- 2) René Descartes, 1596-1650. 本文でとりあげた著作の刊行年に関しては、『方法序説』*Le Discours de la méthode*が1637年、『人間論』*L'Homme*が1664年である。
- 3) Madeleine de Souvré, marquise de Sablé, 1599-1678
- 4) Jean Donneau de Vize, 1638-1710
- 5) Marie-Madeleine Pioche de La Vergne, comtesse de La Fayette, 1634-1693. 本文にもある様に著書『クレープの奥方』*La Princesse de Clèves*の刊行年は、1678年である。
- 6) Bernard Tocanne, *L'idée de nature en France dans la seconde moitié du XVII^e siècle, contribution à l'histoire de la pensée classique*, Klincksieck, 1978, pp.153-155
- 7) *Réflexions ou Sentences et Maximes morales et Réflexions diverses de M. le duc de La Rochefoucauld, avec des observations de M. l'abbé Brotier*, Paris, J.G. Mérimot, 1789.
- 8) *Oeuvres de La Rochefoucauld. Nouvelle édition, revue sur les plus anciennes impressions et les autographes, et augmentée de morceaux inédits, des variantes, de notices...* par M.D.-L.Gilbert et J.Gourdault. *Le lexique de la langue de La Rochefoucauld avec une introduction grammaticale*, par M.Henri Régnier, Paris, Hachette, 1868-1883, Les Grands écrivains de la France.

- 9) *La Rochefoucauld, Réflexions ou Sentences et Maximes morales et Réflexions diverses, édition établie et présentée par Laurence Plazenet*, Paris, Honoré Champion éditeur, 2002.
- 10) *Oeuvres inédites de La Rochefoucauld, publiées d'après les manuscrits, conservés par la famille et précédées de l'histoire de sa vie, par Edouard de Barthélemy*, Paris, Hachette, 1863.

参考文献

- Bernard Tocanne, *L'idée de nature en France dans la seconde moitié du XVII^e siècle, contribution à l'histoire de la pensée classique*, Klincksieck, 1978.
- La Rochefoucauld, *Réflexions ou Sentences et Maximes morales et Réflexions diverses, édition établie et présentée par Laurence Plazenet*, Paris, Honoré Champion éditeur, 2002.

しばた えみ／お茶の水女子大学大学院 比較社会文化学専攻

【指導教員のコメント】

柴田恵美さんの博士論文のテーマである《Honnête homme》は、17世紀後半フランスの宮廷もしくはサロンにおいて一世を風靡した一種の紳士像ですが、正確な定義のとても難しい概念です。当時の美意識研究やパイデヤの変遷といった文脈の中で取り上げられたりもしています。柴田さんはラ・ロシュフーコー思想の特質を浮き彫りにする鍵としてこの概念に注目しました。そして、『箴言集』成立の現場をできる限り丹念にたどることで、抽象概念としてではなく具体的様相のもとにその意味するところを明らかにしようと、今回の海外調査は計画されました。さまざまな刊本を実際に手にとってその内容を検証することができたことはもとより、当時の宮廷・サロンの知的雰囲気伝える定期刊行物を細かに調査できたことは大きな収穫でした。必ずや論文に活かされていくことと期待されます。また彼女の研究対象が社交界という特権的かつ閉鎖的な空間と密接に結びついた「文学」であることを思うと、今回の調査を手掛かりに構築が期待される「場」と「文学」の相関関係整理の手法は、日本の同じような特質を持つ「文学」作品研究の海外発信にも応用できるに違いありません。

(人間文化創成科学研究科 准教授 村田 眞弓)